

銀がでるまで

銀を掘った跡(間歩)は、現在でも比較的簡単に見つけることができます。その代表的なものが龍源寺間歩で、大森銀山の最奥部・休谷にあり、内部が見学できる唯一の間歩です。しかし見学できる部分はほんのわずかで、その奥にアリの巣のように掘られている坑道は見ることができません。この中で行われた作業の様子は、江戸時代に書かれた「石見銀山絵巻」から知ることが出来ます。ここでは石見銀山絵巻をもとに、当時の銀の採掘の様子を見ていくことにしましょう。



水を抜くための縦穴



鉱脈にそって掘った横穴



龍源寺間歩の内部

掘りだす技術

「間歩」と呼ばれる坑道の中は、闇の世界です。明かりはサザエの殻などに油を入れ、そこに火をともしたものを使用しました。

龍源寺間歩では、三九人が昼夜二交代で銀を掘り出していました(一八五八年)。「銀掘」と呼ばれるタガネで掘る者が二四人、「手子」と呼ばれる掘る手伝いをする一才前後の子供が一、二人、不要な石を運び出す者が五人いたと記述されています。



掘る道具

坑内の実測平面図

水をくみ出す

地下深く掘り進むと、湧き水が出てきます。これをくみ出すのも人力です。木製のポンプのようなものを使用しました。



水をくみ出したポンプ

空気を送る

坑道の奥では換気が悪く、病気になる者が多く出ました。平均寿命は三〇才くらいであったと言われています。すこしでも新鮮な空気を送るため、唐箕(穀物に混じった塵・粕殻などを取り除くため、風を送って吹き分ける農具)を改良した送風機が使われました。



送風用の唐箕

運び出す

運び出す仕事は、「柄山負」と呼ばれていました。拾った石を集めて、狭い坑道を背負って外に出す仕事です。



銀を精錬する技術「灰吹法」

大森小学校の前にある下川原吹屋跡は、江戸時代初期の銀の精錬所跡です。ここでは鉛を利用して灰吹法と呼ばれる精錬法を使って銀を取り出していました。灰吹法は、一五三三年に神谷寿禎が朝鮮半島から招いた、慶寿と宗舟という人物によって日本で初めてこの地にもたらされました。この手法によって銀の精錬技術は飛躍的に発達しました。この技術はやがて生野銀山や佐渡金銀山にも伝わり、現在でもその原理が使われています。これも、石見銀山が日本鉱業技術発祥の地と呼ばれる一因です。

遺跡には、鉱石を砕いた要石や選別のための水をためていた跡があります。二階建ての展望台もあり、遺跡全体を眺めることもできます。



下河原の吹屋跡

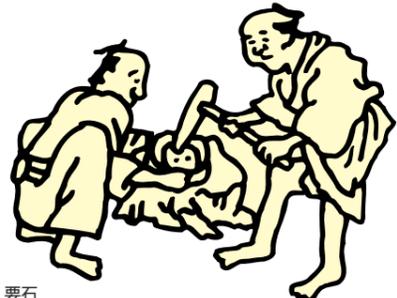


灰吹床の模型



ゆり盆

溜枳



要石



【3】灰吹

銀、鉛の混合物を灰の上に置き、加熱して鉛を灰に吸着させ、銀だけを残す。

【2】選別する

小さく砕いた銀鉱石をざるに入れ、ゆすりながら銀を含む石を選り分ける。

【1】砕く

山から掘り出した銀鉱石を砕いて銀を含んだ石を選び、それを要石の上に乗せて金槌で小さく砕く。